

1 生徒の実態

(1) 学習状況調査結果の推移

R6 入学 現3年生	国語		数学		英語
	2年時	3年時	2年時	3年時	3年時
	県	全国	県	全国	全国
	51.4	50.0	42.0	46.0	44.3
	(0.84)	(0.81)	(0.80)	(0.85)	
R8 正答率の全国比		0.78		0.81	

◎2年時は佐賀県小・中学校学習状況調査、3年時は全国学力・学習状況調査の推移。

◎上段は平均正答率、下段()は県平均を1としての比較。

◎「令和8年正答率の全国比」は全国平均を1としての比較。

◎「中学校英語」は、3技能「聞くこと・読むこと・書くこと」を統合したIRT（項目反応理論）に基づいて算出したIRTスコアを表示。

(2) 学習状況調査・意識調査から読み取れる実態

・令和8年度の3年全国学習状況調査(以下「同」とする)では、国語の問題番号別にみると、3(2)「表現の効果を考えて描写することができるかどうかをみる」問題の本校正答率が92.9%で、県92.4%より0.5%高い。しかし、4(3)「目的に応じて必要な情報に着目して要約し、内容を理解することができるかどうかをみる」問題の本校正答率が42.9%で、県66.3%より23.4%低い。国語の観点別にみると「知識・技能」の本校正答率が51.2%で、県62.3%より11.1%低い。「思考・判断・表現」の本校正答率が50.0%で、県61.6%より11.6%低い。

・同の数学の問題別にみると、4「反比例の関係を表す表の特徴を捉えて、 x の値に対応する y の値を求めることができるかどうかをみる」問題の本校正答率が60.7%で、県50.9%より9.8%高い。しかし、6(3)「総合的・発展的に考え、事柄の特徴を数学的な表現を用いて説明することができるかどうかをみる」問題の本校正答率が17.9%で、県42.8%より24.9%低い。数学の観点別にみると「知識・技能」の本校正答率が54.2%で、県59.9%より5.7%低い。「思考・判断・表現」の本校正答率が19.6%で、県34.8%より15.2%低い。

・同の英語の問題別にみると、[英語3技能]の本校正答率が44.3%で、県45.7%より1.4%低い。「聞くこと」問題の本校正答率が50.0%で、県55.0%より5.0%低い。「読むこと・書くこと」問題の本校正答率が42.0%で、県42.0%で同じ割合である。

・3教科で共通して、知識・技能的な基礎的問題に対して、生徒が理解できるまで個に応じた学習を重ね、反復学習をすることで、理解の定着がみられた。しかし、思考・判断・表現的な応用的問題に対しては、問題文の取り違い、解法の手順の誤り、途中で意味や解法が分からなくなるなど、学習理解と解き方の課題がみられた。特に、記述式の問題形式では、正答率が低い傾向がみられた。そのため、思考力を伴う問題では、より丁寧な教師の解説、生徒同士の学びあいを充実させるとともに、指導場面に応じたデジタルとアナログの教材を試みるなど、生徒一人ひとりの理解の程度を大切に、計画的な学習指導を進めていきたいと考えている。

・令和8年度の3年全国学習状況調査の生徒質問(22)の「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか」で、「できている。どちらかといえばできている」の本校生徒の割合は82.2%(県79.9%)で、県より2.3%高い。さらに、同(42)の「学級の生徒との間

で話し合い活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか」で、「当てはまる。どちらかといえば当てはまる」の本校生徒の割合は 92.8%(県 86.8%)で、県より 6.0%高い。これらは、日頃の先生方の探究的活動を取り入れた授業実践、学級学年経営の取り組みの成果でもある。

2 改善に向けた具体的な取組

(1) 授業づくり、指導方法の改善・充実のための重点取組

・本年度は「自ら学びを拓き、ともに対話を深める生徒の育成」を校内研究の主題とした。「授業づくり部会(全教科で単元の見直しを示すスライド活用を通して、毎時間の終わりに学習内容とプロセスを振り返る活動を実施した)」と「学級づくり部会(対話力アップを目的としたトレーニング：川中タイムを導入した)」の両輪で、実践を重ねている。その結果、生徒自身が学習状況をメタ認知し、次の学習への見通しをもつ姿が見られた。また、他者受容の精神が育まれ、普段交流の少ない生徒同士が笑顔で対話する場面が増えた。

・授業では、タブレットとクラウド環境を活用し、話し合い活動を取り入れ、生徒同士、生徒と教師、AIの活用を通して、生徒は、自分の考えを他者に伝え、比較検討して、自身の考えが深まる学習環境を整えていく。その方法として、ワークシート、スプレッドシートやスライドなどを提示した電子黒板、ホワイトボードで伝える活動を進めている。

・7月29日(水)の校内研修会で、2年生の県の学習状況調査を踏まえ、各教科で以下の対策を行うことを検討し、全職員で共通理解を図り、全教科の学習指導につなげていきたいと考える。

①国語では、良い点として「漢字の書き取り」「表現の効果について根拠を明確にしている」「条件のある記述問題」と考えた。改善点として「単語や文節などの文法問題」「話し合い活動の中で、他者の意見に触れ、自分の意見を述べる」があり、その対策として「丁寧に時間をかけながら、知識の定着を図る」「朝の会・帰りの会などで教師側が意図的に条件設定を行う。発言に対して質疑応答を行う」ことを指導し、個に応じた支援することが必要である。②数学では、良い点として「式と計算分野は全国平均正答率より高く、理解が示されている」と考えた。改善点として「関数や、図形分野の正答率が低く、数学的事象をイメージする力が低い。また、0.25の生徒が問題を正確に読み取れていない」があり、その対策として「授業の中で、図や表、グラフを視覚的に確認する」「操作できる活動を多く取り入れる」ことを指導し、問題の場面設定の工夫、学びの共有化と具体化に取り組むことが必要である。③英語では、良い点として「語彙、語形が読み取れ、視覚的な問題は答えやすい」「基本的な文の理解力はある」と考えた。改善点として「長文でのリスニング力が低い。リスニングが1回示された場合に読みとれない。要点の把握力が弱い。自分の考えを英作文で表現することが苦手である」があり、その対策として「ポイントをおさえて聞いたり、読んだりする」「基本文型を使ったQ&A形式の繰り返し練習」を指導し、帯学習と反復学習、言語活動に力を入れることが必要である。これらのことを念頭に置き、自分の教科に置き換えて考え、全職員で指導に役立たせる。

(2) (授業以外) 児童・生徒の課題改善のための重点取組

・令和5年度から実施している「川中タイム」を4年目として、6月から(週1回、水曜日の朝8:00～8:10)各学年で実施している。また、各学年で、小グループでの発表の機会を設定し、生徒に聞き方と話し方の両方の役割を務めさせ、生徒自身の考えを相手に伝える力を高めている。さらに、「成果物づくり(川中タイムでクイズやポスターなどの作成)」にも取り組んでいる。

・「ミライシード(個別学習、協働学習、教育効果の可視化)」は、各教科の中で、授業や家庭学習を通して、さらに全校一斉に、期末考査前の朝の時間(8:00～8:15)と帰りの時間(15:55～16:10)を使い、定期的に取り組んでいる。

・川登中校区、小中連携の「学びの連携部」の取り組みとして、家庭学習強化週間を年に2回(6月、11月)設定して、生徒会を中心とした学習の呼びかけ、アンケートを使い、学習意欲を確認している。また、小中学校の3校で、自学ノートの頑張りを各校で掲示し、より学びの質を高めている。